

4. 活動を通じた地域との連携 ～学生と地域をつなぐ～

ボランティア・NPO 活動センターでは、地域の様々な団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にもつながる活動に取り組んでいます。ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生達へ向けては、地域とつながる活動のきっかけとなるような体験企画を学生スタッフを中心となって提供しています。また、学生スタッフ自身も、地域の団体や行政からの協力依頼に対し積極的に関わり、ボランティア活動の裾野を広げるように心がけています。

事業名	サマーフェスティバル2018（継続企画5年目）			
日時	2018年8月22日（水）10時00分～16時30分			
場所	深草児童館			
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）			
参加人数	ボランティア参加者37名（学生スタッフ24名、一般学生13名） 深草児童館参加者 65名			
企画メンバー （学生スタッフ）	吉田 響（文学3） 中川寛喜（経済2） 大嶋優作（政策2） 世田丈貴（法学1）	清水理沙（経済3） 竹本智紀（法学2） 佐藤鴻河（政策2） 西村志穂（政策1）	安岐 萌（法学3） 松岡俊希（法学2） 武村祐資（政策2）	木村太翼（文学2） 吉田 樹（法学2） 神田瑞季（経済1）

1. 経緯・目的

夏休み中の児童館は通常とは異なり、子どもたちは朝から夕方までの長時間、児童館に滞在することになる。また、キャンパス近隣の深草児童館の存在を龍谷大学生に広め、児童館という場を知るきっかけにするとともに、学生と深草児童館の繋がりを強めたい。そこで、ボランティア・NPO 活動センター（以下、センター）の学生スタッフが同児童館に通う子どもたちと龍谷大学生を繋げつつ、遊びを通して夏休みの最高の思い出を作ろうと始まったのが『サマーフェスティバル』である。今年もこのボランティア企画を実施するにあたって、以下の事項を目的とした。

- ①普段出来ないような遊びを通して、夏休みの最高の思い出を作る。
- ②私たち大学生が子どもたちにとってのロールモデルであることを自覚し、将来深草児童館の子どもたちに「ボランティアをしたい」と思ってもらえるよう行動する。
- ③一般学生に本企画に参加することによりボランティアの楽しさに気付いてもらい、次のボランティアへと繋がれるようにする。

2. 概要

- 1) プログラム内容
 - ・竹水鉄砲



- ・ピンポンカップインゲーム
- ・箱の中身当てゲーム
- ・魚釣り（雨天時用プログラム）

2) 当日までの動き

- ・5月下旬 児童館より依頼をいただき、企画実施決定。
- ・6月中旬 企画メンバー間での話し合い、児童館との打ち合わせを重ね、プログラム内容を決定。
- ・6月下旬 学内でのボランティア募集。
- ・8月10日（金）竹切り・竹水鉄砲制作。
一般学生1名参加
* 竹水鉄砲に使用した竹は、NPO 法人竹と緑からご提供いただいた。
- ・8月21日（火）、リハーサルを行い、最終調整。
一般学生13名参加。

3) 当日のスケジュール

- 10:30 センター集合。アイスブレイク、各プログラムに分かれて打ち合わせ後、児童館へと出発
- 12:00 深草児童館到着、準備開始
- 13:30 開会式後、サマーフェスティバル開始。
竹水鉄砲、ピンポンカップインゲーム、箱の中身当てゲーム、休憩室の4ブースに分かれ同時進行
- 16:30 ゲーム終了後、表彰式と閉会式を行う。
ボランティア参加者にアンケート形式で振り返り
- 17:00 活動終了、深草児童館で解散

3. 参加者の声・得られた効果など

参加者に対してアンケートを実施し、以下の結果が得られた。

活動に満足した…88.2%／普通…11.8%

回答内容抜粋

- ・普段児童と交流する機会がないので、良い経験が積めた。
- ・子どもたちが遊びの中で自慢しに来てくれたり、ドヤ顔をしてくれたり、話をしに来てくれたりして、このサマーフェスティバルを楽しんでくれていると実感できた。

その他、タイムスケジュールが大幅に狂ったことについて、臨機応変に動いていたという意見があった一方で、もう少し機転を利かせルールを変更するなどして時間のずれを修正すべきだったという意見も見られた。



4. 反省点

- ・タイムスケジュール通り進めることができず、活動予定時間が大幅に遅れたことを受け、当日の流れや準備物、名簿等、児童館の職員、先生方とも共有して、打ち合わせを綿密に行う必要がある。

- ・水を使った遊びをするため、児童館の入り口を泥で汚してしまった。何らかの工夫をすることで、今後汚さないようにしていきたい。

5. 学んだこと・今後の課題

- ・昨年度に比べてボランティアの一般応募者が倍増し、13名が参加した。センター移転先の出入り口である噴水近くに、ボランティア募集の看板を出せた効果が大いと思われる。
- ・学生スタッフと一般学生間の交流の機会である竹切りを有効活用することで、学生間のコミュニケーションを取る貴重な場となる。リハーサル、当日までに顔合わせをしておくことで、より多くの改善点が発見でき、スムーズに進行できた。
- ・当日、小学生の参加者リストが未作成であったことがタイムスケジュールを狂わせる一番の要因であった。名簿を事前に作成しておくことで当日の動きに余裕が生まれると感じた。
- ・竹水鉄砲を行っている際、待機している児童や学生が陽射しにさらされている状況であった。テントや飲み物を用意するなど、熱中症対策等をする必要がある。
- ・子どもたちが竹水鉄砲で遊ぶことでサマーフェスティバルのことを記憶し続けてもらえるように、今年は竹水鉄砲を深草児童館に寄付をした。今後もそれを使って楽しく遊んでもらえると良いと思う。

6. 経費

テープ、プログラムで使用した備品等に必要経費は全額深草児童館より支出。(約7,000円)

大学からの支出は下記のみ

A4サイズ用紙500枚(広報用) 240円

〈報告者：吉田 樹〉



事業名	大津祭へのボランティア協力（継続企画13年目）
日時	①2018年7月19日（木）～27日（金） 学内広報Ⅰ ②2018年7月11日（水） 12時35分～13時35分 学内広報Ⅱ ③2018年8月3日（金） 17時00分～18時00分 事前勉強会 ④2018年9月10日（月） 15時00分～17時00分 事前交流会 ⑤2018年9月24日（月） 14時00分～16時00分 曳き手説明会 ⑥2018年9月30日（日） 台風のため中止 巡行サポーター説明会 ⑦2018年10月6日（土） 14時00分～18時00分 宵宮 ⑧2018年10月7日（日） 9時00分～17時30分 本祭
場所	瀬田キャンパス野外ステージ前 ① 瀬田キャンパス2号館前 ② 大津祭曳山展示館 ③ 瀬田キャンパス学生交流会館カンファレンスルーム ④ 大津中心市街地 ⑤⑥⑦⑧
主催	特定非営利活動法人 大津祭曳山連盟
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	実人数33名（学生スタッフ19名・一般学生14名） ③12名（うち学生スタッフ12名） ④15名（うち学生スタッフ8名） ⑤2名（うち学生スタッフ2名） ⑦3名（うち学生スタッフ3名） ⑧33名（うち学生スタッフ19名）
企画メンバー （学生スタッフ）	浅川真博（理工4） 仲上昂希（理工4） 松澤宏紀（理工4） 山本大揮（理工4） 瀧本真由（農学4） 曾根竜也（社会3） 田中直樹（社会3） 玉田遼河（社会3） 川崎良祐（理工2） 石川秀凱（社会2） 太田有里（社会2） 澤 優希（社会2） 正中葉帆（社会2） 赤木宏斗（社会1） 土肥亮太（社会1）

1. 経緯・目的

- ・国指定無形民俗文化財に指定されている歴史ある大津祭に、ボランティア参加することで龍大生に大津の伝統、文化について知ってもらう。
- ・大津駅周辺地域のマンパワー不足の問題が生じている現状を知り、龍大生が大津祭に参加することで、祭を盛り上げ、活性化をねらう。

2. 概要

- ① 学内広報Ⅰ
チラシ配布
Let's ボランティアでの広報
学生交流会館エキシビジョンの展示
- ② 学内広報Ⅱ
大津祭曳山連盟の方々の実演
お囃子の演奏、ボランティア募集のチラシ配布
- ③ 事前勉強会
大津祭展示館訪問
大津祭曳山連盟の方からの大津祭の説明
- ④ 事前交流会

ボランティア参加学生への大津祭の紹介
参加学生の顔合わせ、交流

- ⑤ 曳き手説明会
曳き手ボランティア参加者への説明会
- ⑥ 巡行サポーター説明会
巡行サポーター参加者への説明会
- ⑦ 宵宮
チラシ配り
- ⑧ 本祭（曳山綱曳き・安全警備）
西王母山、孔明祈水山の曳き手
垂れ幕を持ち、観客の安全確保

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・曳き手として参加し、様々な人と交流することができた。
コミュニケーション能力の向上につながったと思う。
- ・一緒に曳き手をやった地域の方や、地元の観客の方にたくさん「頑張れ!」や「おかえり!」などの温かい言葉をかけてもらえて、嬉しかった。
- ・4年間曳き手として参加してきたが、今年もと

でも楽しかった。卒業してからも参加したい。

- ・大津のまち全体で盛り上がっているという一体感がとても良かった。
- ・観光をされている方に質問されたときに答えられるように、もっと大津祭について自分から調べておけば良かった。
- ・曳山の巡行の都合上、長い待ち時間があったが、その間に地元の人との交流ができ良かった。
- ・とても楽しく曳山を曳けた。腕は疲れたが、坂を上りきった時や、「お疲れさま」、「ありがとう」と声をかけていただいた時は嬉しく、参加してよかったと思った。



4. 反省点

- ・ボランティア参加者に対して現場の状況や情報を十分に伝えられていなかった。本祭1週間前の巡行サポーター説明会が台風の影響により中止となった。本来、そこで役割などについての説明があるが、その影響で当日の説明となった。そのため、巡行サポーターに加え、神輿役もすることになった参加者が困惑していた。役割や班分けなどについて、事前に大津祭曳山連盟の方に確認を取り、参加者に必要な情報を事前に伝えておく良かったのではないかと考えている。安心して参加してもらえるよう、可能な限り、参加者に対して情報提供や共有ができるよう改善していきたい。また、台風などの緊急時の対応についても考えていく必要があると感じた。
- ・センターで作成したボランティア申込用紙の記入項目に不備があり、LINE-IDでの参加者の登録がスムーズに行うことができず、メールでQRコードを送り追加してもらったり、参加者に後日個別で住所を聞くために連絡を取る必要があった。申込用紙作成時には気をつけたい。

5. 学んだこと・今後の課題

- ・昨年同様、多くの学生が大津祭に参加した。

大津祭終了後の振り返りやアンケートで「参加して良かった」「また参加したい」などの感想が多数あった。こういった声や当日の状況から、学生に大津祭の魅力が伝わり、楽しんでもらうことができたと思う。また事前勉強会などを行うことで事前に大津祭の伝統、文化、現状を伝える時間も持てた。この企画の目的は達成されたと考えている。

- ・昨年の反省から、休憩時間を十分に確保出来なかった事を課題としていたが、今年は巡行中に15分間の休憩を2回、昼食休憩は1時間取れるように大津祭曳山連盟の方と話し合い、休憩時間を確保した。また、飲み物や塩分補給のタブレット等を用意し、参加者の体調に十分な配慮を行うことができたのは良かったと思う。
- ・今回、大津祭に参加させていただくことで、伝統を受け継ぐ難しさや大切さを学ぶだけでなく、地域の方とも交流を深めることができた。大津祭曳山連盟の方々には、ボランティア募集の際にお囃子を演奏していただいたり、交流会では大津祭の意義や内容を丁寧に説明していただくなどご協力をいただいた。大津祭終了後、地域の方から「参加してくれてありがとう」と言葉をいただいた。この伝統ある祭りを大切にされていること、その思いや伝統を若い私たちが引き継いでほしいという熱い思いを感じた。このような思いに共感し、来年以降もこの企画を続けていきたいと思う。



6. 経 費

企画メンバー交通費補助	3,740円
ボランティア保険	2,100円
消耗品（A4用紙）	311円
はっぴクリーニング代	4,914円
合計	11,065円

〈報告者：太田 有里、土肥 亮太、赤木 宏斗、川崎 良祐〉

事業名	第28回深草ふれあいプラザへの協力（継続企画8年目）
日時	2018年10月21日（日）9時00分～16時00分
場所	藤森神社（京都市伏見区深草）
主催	深草ふれあい事業実行委員会
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	48名（一般学生17名 学生スタッフ31名）
企画メンバー （学生スタッフ）	玉川隆明（文学3） 土橋茉奈（文学3） 坂井 綾（経営3） 富上弥生（政策3） 中川寛喜（経済2） 松岡俊希（法学2） 吉田 樹（法学2） 大嶋優作（政策2） 佐藤鴻河（政策2） 武村祐資（政策2） 樋口大輝（政策2） 松田侑子（国際2） 神田瑞季（経済1） 黒崎雄太（経済1） 西野亜優（経済1） 松尾宗次朗（経済1） 世田丈貴（法学1） 渡久山盛陽（政策1） 西村志穂（政策1） 平尾萌衣（政策1）

1. 経緯・目的

『深草ふれあいプラザ』とは、深草地域の約20団体が集まり、交流を行うことで深草地域への愛着とお互いの結びつきを深めるイベントである。多くの地域住民の協力のもと開催されており、2011年からボランティア・NPO 活動センター（以下、センター）も協力している。

今年度も実行委員会事務局の伏見区深草支所より協力依頼を頂き、龍大生にボランティアのきっかけにしてもらいたいと考え、このイベントへの参加を以下の目的で実施した。

- ①龍大生が深草地域の一員であることを理解し、深草地域に関心や興味を持ってもらう。
- ②深草地域の一員として、地域の子どもや様々な人と交流することにより、「人とのつながり」を感じてもらい、その大切さを理解してもらう。
- ③今年度もセンターのブースを出展し、センターの存在や活動を発信することにより認知度向上を狙う。

2. 概要

- ・ステージプログラムの一部である「5学区対抗戦」の司会と補助
- ・地域の方が運営している模擬店の販売や、ごみ分別、くじ引き等各種ブースの補助
- ・龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター



- のブース出展（活動紹介、水鉄砲コーナー）
- ・着ぐるみの着用及び補助

3. 参加者の声・得られた効果など

他のボランティア企画に参加した学生にこの活動を紹介することにより、リピーターとしてこのイベントに協力し、運営側の皆さんや来場者との交流を通じて参加してもらうことができた。企画の責任者同士の協力が申し込みの増加につながる事が分かった。

また、今回の活動については、参加学生から次のような感想があった。

- ・初めてボランティアをしたが、とても楽しかった。
- ・祭りの運営側の大変さが分かった。
- ・日本の文化に触れることができてよかった。
- ・とても雰囲気が良かった、来年も参加したいと思った。
- ・地域の方がやさしくてよかった。

4. 反省点

準備段階では、同時進行している他の企画との兼ね合いを気にしすぎたことから、作業の分担に偏りが出てしまい、一回生への引き継ぎがうまくできなかった。

また、休憩をとる順などを事前に決めていなかったため、当日の休憩時間にばらつきが発生し、一部の学生に大きな負担を与えることになってしまった。事前に休憩時間などのシフトを作成するべきだった。

全体的に作業がギリギリになってしまい、その結果、前年の制作物を流用することなど詰めが甘い部分もあった。日程を逆算して予定を立てる必要があると感じた。



5. 学んだこと・今後の課題

友人からの紹介で参加してくれた一般学生が多かったことから、参加者を集めるのには口コミが一番効果的であることが分かった。

一方、留学生からの申し込みについては、連絡などをひらがなで送る、アンケートに紙媒体とグーグルフォームの二つ用意するなど一部対応していたが、全体説明の時などは対応が難しかった。留学生の対応をするときには、丁寧にゆっくりと話すことが大切であると感じた一方

で、自分でできることは自分でしてもらうことが大切であることも学んだ。

最後に、継続企画ということもあり、主催者側とのやりとりが少し曖昧になってしまったため、当日の動きで戸惑う点が多かった。先輩からの引き継ぎはあるものの、年によって異なる動きを依頼されることもあり、関わる学生は毎年変わっていくので主催者側にもその点を理解いただき、報告・連絡・相談を密にしてもらうよう、お願いしていく必要があると感じた。

6. 経 費

清掃用品、エプロン	4,068円
ブース用備品	2,950円
水鉄砲関係グッズ	1,512円
その他消耗品	851円
合計	9,381円

〈報告者：松岡 俊希〉

事業名	スペシャルオリンピックスを知ろう（継続企画2年目）
日時 場所	事前交流会：2018年10月24日（水）17時30分～19時00分 龍谷大学瀬田キャンパス学生交流会館カンファレンスルーム ボランティア体験：2018年11月3日（土）13時00分～16時00分 におの浜ふれあいスポーツセンター内アリーナ
主 催	スペシャルオリンピックス日本・滋賀 ボランティア・NPO 活動センター（瀬田） におの浜ふれあいスポーツセンター
参加人数	事前交流会：11名（うち学生スタッフ7名） 運動会当日：29名（うち学生スタッフ20名）
企画メンバー （学生スタッフ）	藤井愛里（社会3） 中川和謙（理工2） 頼田翔平（理工2） 田井拓暉（社会2） 余村瑠香（社会1） 近藤真佑華（農学1）

1. 経緯・目的

昨年実施したミニ運動会が参加された方に好評で、スペシャルオリンピックス日本・滋賀から、今年も障がい者と健常者が垣根なく楽しめる機会を学生主体で作ってもらえないかと相談があった。私たちも継続して障がい者の理解を深めたいという思いや龍大生にスペシャルオリンピックスを知ってもらいたいという思いがあった。そのため、今年度も障がい者理解促進やスペシャルオリンピックスの存在を龍大生に

知ってもらう機会として、この企画を実施する。

健常者も障がい者も一緒に楽しめるスポーツを通じて交流を図り、相互理解を深める。そして、今後どのように関係をつくっていけばよいのかをみんなで考えるきっかけにしたい。

2. 概 要

(1) 事前交流会・説明会内容

- ・参加者同士の交流
- ・スペシャルオリンピックスについての説明

- ・参加する上で気をつけること（知的障がい者との接し方など）

参加者同士での交流は企画メンバーが進行を担当し、スペシャルオリンピックスについての説明と参加する上での注意事項については、スペシャルオリンピックス日本・滋賀の菊氏と檜山氏にお話していただいた。

(2) ボランティア体験

運動会 13時00分～16時00分

- プログラム
- ①開会式
 - ②玉入れ
 - ③休憩
 - ④障害物リレー
 - ⑤休憩
 - ⑥借り物競争
 - ⑦休憩
 - ⑧しっぽとり
 - ⑨閉会式

約120名の参加者が集まり、4つのチームに分かれてチーム対抗戦を行った。アスリートの家族やコーチの方々のサポートを受けながら、楽しく活動することができた。



3. 参加者の声など

- ・障がいのある方とどう接したら良いのか不安だったが運動会を通していろいろと話ができ、仲良くなることができた。
- ・多くの人と関わって障がいを感じず、楽しく活動することができた。
- ・順位関係なく皆平等に表彰されるスペシャルオリンピックスの考えが素晴らしいと思った。
- ・アスリートのいきいきした姿を直に見ることができ、充実した時間を過ごすことができた。

4. 反省点

- ・募集開始が遅くなってしまったため事前交流会・説明会に参加できない人が多かった。事前交流会・説明会は当日の説明、スペシャルオリンピックスや障がい者との関わり方について知ってもらう大切な機会である。そのため、参加者には可能な限り参加してもらえよう早めに広報し、その重要性を伝えていく必要があったと考える。
- ・打ち合わせの際、地区ごとにチーム編成をすることになったが、人数にばらつきが生じ、すべての種目に参加できない学生参加者がでてしまった。当日受付にて、状況を見て対応できるとよかった。
- ・しっぽ取りなどルールが複雑な種目もあり、戸惑うアスリートがいた。ルールをもっと簡単にしたり、学生参加者に関してはルールをより詳しく説明するなどの対応が必要であった。

5. 学んだこと・今後の課題

- ・種目内容を考えるにあたって、私たち学生目線だけではなく、知的障がい者に対して配慮が必要だったことを学んだ。複雑なルールや、事前の説明の仕方を今後改善していきたい。また、事前準備段階からアスリートからの意見をとり入れるよう、工夫していきたい。
- ・休憩をこまめにとることで、アスリートと交流する時間を多くとることができ、親密度が高まった。
- ・アスリートの方々は球技大会のように1つの競技を長時間行うよりも、さまざまな種目を行うほうが楽しんでもらえると聞いていたので、運動会のようにさまざまな種目を取り入れたことでアスリートの方々に楽しんでもらうことができた。
- ・今回の企画が、知的障がい者とのように関係をつくっていけばよいのかを考える良い機会となったと考えている。これからも、このようなきっかけを与えてくれたスペシャルオリンピックス日本・滋賀との関係を持ち続け、より多くの人々にスペシャルオリンピックスとアスリートに対する理解を広めることができるよう尽力していきたい。

6. 経費

消耗品（インク、ペンなど） 5,356円

〈報告者：中川 和謙〉



事業名	南区民ふれあいまつり『ちびっこひろば』へのブース出展（継続企画4年目）
日時	2018年11月11日（日）9時00分～15時00分
場所	東寺（教王護国寺）
主催	南区民ふれあい事業実行委員会
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	32名（うち学生スタッフ21名）
企画メンバー （学生スタッフ）	辻 裕兎（法学4） 日野萌絵子（法学4） 山田京花（政策3） 中川寛喜（経済2） 松岡俊希（法学2） 竹本智紀（法学2） 樋口大輝（政策2） 川村有希（政策2） 世田丈貴（法学1） 西村志穂（政策1） 平尾萌衣（政策1）

1. 経緯・目的

京都唯一の平安京の遺構寺院である東寺で、地域住民相互のふれあいを目的とした『南区民ふれあいまつり』が毎年開催されている。ボランティア・NPO 活動センター（以下、センター）は、そのイベント事務局である南区役所から、「子ども達が遊ぶための『ちびっこひろば』に楽しいブースを企画してほしい」と毎年依頼いただいている。この企画を継続的に実施することにより南区との関わりをさらに深くし、センターをより広い地域に認知してもらうきっかけにすることと、以下のことを目的に出展を行うことに至った。

- ・ブースに足を運んでくれた子どもたちにゲームやものづくりを通して、龍谷大学生と東寺で遊んだ思い出を作ってもらおう。
- ・龍谷大学生にボランティアをする機会を提供するとともに、このまつりに参加することで、まちづくりに対する地域の取り組みやボランティア活動に興味を持ってもらおう。
- ・私たちの大学がある京都は、多くの歴史的な建造物がある特別な地域であるが、日常生活の中ではそれらに触れる機会が少ないので、古都京都ならではの雰囲気の中での活動を楽しんでもらう。



しんでもらう。

2. 概要

ちびっこひろばに以下のブース出展を行った。

1) 輪投げ

3レーンで輪投げを実施した。入った輪の数によってお菓子を配布した。



2) 紙皿水族館づくり

学生が子どもにオリジナルの紙皿水族館の作り方を教えながら、一緒に作成した。会話を楽しみながら一緒に作業ができるように、紙皿水族館はある程度作った状態のものを持っていき、子どもが簡単に作れるようにした。また、作った紙皿水族館は持ち帰ってもらった。

これらの活動内容に対してシフトを組み、ブース運営という形で子どもたちの誘導やルール説明、作り方を教えることなどをボランティア内容とした。

3. 参加者の声・得られた効果など

参加者からは、「子どもたちにしっかりと楽しんでもらえたうえで自分も楽しむことができた」「また来年も参加したい」といった声を多く聞くことができ、ボランティアに興味を持ってもらえた。その他にも、以下の声があった。

- ・他のお祭りのボランティアも紹介して欲しい。
- ・子どもたちと触れ合うことができ、いい経験ができた。
- ・ボランティアをするだけでなく、休憩時間に祭りを楽しむことができた。
- ・天気もよく、楽しかった。また参加したいと思った。
- ・子どもにすごい、おもしろいなどと言われた時や親御さんにいいアイデアだと言ってもらえたことが嬉しかった。

4. 反省点

1) 準備段階

- ・一人ひとりの作業量にばらつきが出てしま

い、負担が多い人と、少ない人がでてしまった。

- ・お金の計算を、一人だけに押しつけてしまった。

2) 当日

- ・お菓子をたくさん準備していたが、昼前にはすべてなくなってしまい、買い出しに行くことになった。
- ・輪投げでは入った輪の数によってお菓子を配るが、個数が途中であやふやになってしまうことがあった。
- ・人数が多かったので、フリーマンやカメラ係を作っても良かった。

5. 学んだこと・今後の課題

- ・4年目の継続企画ということもあり南区の担当者の方としっかりと連絡を取り合い、情報共有を行うことができた。団体側と連絡を取り合い情報共有を行うことは、企画運営において非常に重要であり、企画を円滑に進めることができるだけでなく、その後の団体との関係を良好に築くことができるとわかった。
- ・今年はチラシにLINEのQRコードを載せ、気軽にLINEで質問ができるようにしたためか、過去最大の一般学生の参加があった。LINEという広く使われているSNSを使うことは、有効な広報活動だと思った。

6. 経 費

南区民ふれあい実行委員会より必要経費が支出されたため、経費なし。

〈報告者：中川 寛喜〉

事業名	コミュニティ企画 防災減災そなえパーク（継続企画5年目）
日時	事前交流会：2019年3月6日（水）14時00分～16時30分 当日：2019年3月10日（日）9時00分～17時00分
場所	滋賀県営都市公園びわこ文化公園 催し物広場及び公園管理事務所
主催	滋賀県営びわこ文化公園 指定管理者 近江鉄道ゆうグループ
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	交流会：20名（うち学生スタッフ 16名） 当日：31名（うち学生スタッフ 23名）
企画メンバー （学生スタッフ）	杉村歩美（社会3） 曾根竜也（社会3） 永井沙季（理工2） 樋上翔太（理工2） 山元 樹（理工2） 木下綾華（社会1） 高岡宏幸（社会1） 南 佳奈（社会1） 渡中新太郎（農学1）

1. 経緯・目的

私たちは、これまで6年にわたって龍谷大学の隣に位置する「滋賀県営都市公園びわこ文化公園」で行われた「防災・減災そなえパークの日」に参画してきた。災害時、円滑な安否確認を実施するために必要なのは地域住民同士のつながりであり、瀬田住民が多く参加するこのイベントで龍大生と地域住民、また地域住民同士であっても普段からのつながりがない人たちがつながる機会を提供したいと考えた。そこで私たちは、来場者と共に防災について学びながら、龍大生と地域住民だけでなく、地域住民同士でもつながる機会を提供し、「地域でのつながりの大切さ」に気付いてもらえるようなブースを出展することとした。

今年度、瀬田キャンパスの学生スタッフは「地域とのつながり」を重視しており、このイベントに参画し地域におけるつながりの維持、発展に貢献したいと考えた。

2. 概要

(1) 準備

- ①びわこ文化公園・協力団体（ボーイスカウト 大津第21団）との事前打ち合わせ
第1回：2018年11月21日（水）
第2回：2019年1月25日（金）
- ②イベント広報 学内で龍大生に対しボランティア募集、イベント広報を12月より行った。
- ③事前交流会 共に活動する参加学生と企画メンバーが事前に集まって交流を図り、本企画やイベントについて理解を深めることで、活動を安心して円滑に進めるために実施した。

(2) 当日（イベント来場者：約1340名）

・ボランティア活動

①チャレンジ！防災ミッション（来場者：約50名）

来場者の子どもたちが、私たちがあらかじめ公園内に仕掛けていたクイズを解き、体験をしながら参加学生とともに楽しみつつ、一緒に防災について学ぶブース運営を行った。

②びぶんちゃん（※）とつくってまなぼう

※：びわこ文化公園マスコットキャラクター（来場者：約50名）

災害時の状況を想定し、どのようにすれば良いのか考えてもらい、新聞紙やラップで簡易スリッパと止血応急手当の模擬体験を行った。また、アレルギーの有無の確認をしたうえで、非常食（アルファ米）の試食体験を行った。

③展示ブース（来場者：約20名）

災害を身近に感じ、防災意識を高めることを目的に、龍谷大学の災害復興支援活動や当センターの活動紹介、コミュニティ企画の活動について展示した。

・振り返り

活動を通して感じたこと、考えたことをワークシートを使ってふりかえり、グループ内で話した後、参加者全員で共有した。アンケートを行い、今後のコミュニティ企画活動の参考とした。



3. 参加者の声・得られた効果など

(1) チャレンジ！防災ミッション

- ・子ども達、親御さんなどと幅広く交流できた。
- ・パズルコーナーを盛り込んだが、幼稚園児の子と共感しながら楽しくできた。また、正解したときに見せた笑顔が楽しげな様子でうれしかった。

(2) びぶんちゃんをつくってまなぼう

- ・簡易スリッパを家に帰ってからでも作りたいと言ってくれた子がいて、やった甲斐があったと思う。
- ・一緒に作成することで子ども、親御さん、ボランティアスタッフの交流が図れたと感じた。

(3) 全体

- ・普段あまり地域の方々と触れあう機会がないので、参加して良かった。
- ・ボランティア参加することで、子どもへの接し方や防災の知識など勉強になった。また、普段地域の方と関わることがないので、いろんな方と交流できたことが新鮮だった。とても楽しめた。
- ・初めてのボランティア参加で不安だったが、参加してくれた子どもたちが楽しんでくれて良かった。

4. 反省

- ・雨天時の対策が足りなかった。雨の予報で会場が芝生から、足場の硬いアスファルトの場所に急遽変更になった。こういった変更にも臨機応変に対応する必要があると感じた。
- ・「びぶんちゃんをつくってまなぼう」で備品が散乱したり準備物が不足するトラブルがあり、いろんな場面を想定しておくと思いとう。
- ・「チャレンジ！防災ミッション」において、当日の情報共有不足から、混乱が生じた。時間を決めて、全体の状況を全体で共有するようにするなど、工夫をしたい。

- ・企画長は、両方のブースの進行を把握するために、ブースに入らずに全体的な進行状況を確認できるようにしておくと思う。

5. 学んだこと・今後の課題

(1) 学んだこと

- ・ブース内容をいろいろと工夫することで、ボランティアの方と地域の方々が楽しんで交流することができた。
- ・今回ボーイスカウトさんとコラボしたことで、新たなつながりが生まれた。今後は、学園祭のお知らせをするなど、団体、その子どもたちともつながりを続けていければと考えている。
- ・「チャレンジ！防災ミッション」でクイズの解答をしまっておく宝箱を作成し設置した。このような子どもの興味を引き出す仕掛けは重要だと改めて感じた。
- ・一般学生の参加理由として、「ボランティアに参加したかったから」が多かった。今後は、広報の仕方を工夫して、やってみたい、参加したいと思っている学生にリーチしていきたい。

(2) 今後の課題

簡易スリッパ用の新聞が小さい子どもにとっては大きく、作成しにくい場面があった。幼児から児童までの幅広い年齢層の子どもを想定した作り方をボランティア学生に伝えきれていなかったため、混乱もあった。細かな注意点までマニュアルに記載しておけば、知らなかった、聞いていなかったということが減らせると思う。

6. 経 費

消耗品（紙コップ、ラップなど）	4,752円
ボランティア保険5名分	1,500円
合計	6,252円

〈報告者：樋上 翔太〉

事業名	コーディネート班 発掘し隊（継続企画3年目）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
企画メンバー （学生スタッフ）	橋本昌尚（農学3） 下屋敷咲喜（社会2） 二木亮英（社会2） 松田 廉（社会2） 松葉千穂（社会2） 川崎綾香（農学2） 木下綾華（社会1） 古賀明日香（社会1） 土肥亮太（社会1） 南 佳奈（社会1）

1. 経緯・目的

今年度、ボランティア・NPO 活動センターに登録している団体は266件（2019年3月現在）あるが、学生スタッフがその活動内容や目的などを理解できていない団体も多くある。理解が不十分なままでボランティアコーディネートを行うと、来室者と団体のニーズに正確に応じることはできない。そこで、瀬田キャンパス学生スタッフの班活動の1つであるコーディネート班・発掘し隊では、ボランティアコーディネートを行う学生スタッフ自身がボランティア活動に参加して調査活動を行い、活動内容や団体の思い、考えを団体から聞かせていただく活動を行ってきた。聞き取ってきた内容、活動の詳細、感じたことなどをミーティング等で共有し、情報をまとめた「発掘ノート」を作成、ボランティアを探しに来た学生へのボランティアコーディネートにいかせるようにしている。この活動を通して、来室者のボランティアへの参加を促していきたい。

2. 概要

（1）活動回数：年間4回実施

日程	団体名	地域	分野	人数
2018年 7月14日	湖南ホームタウン	滋賀県守山市	障がい 余暇支援	5名
11月14日	ふらっと RITTO	滋賀県栗東市	子ども 居場所づくり	3名
11月17日	わくわくキッズ	京都府長岡京市	子ども 交流	5名
2019年 3月4日	グループホーム わかすぎの丘・七里	滋賀県竜王町	高齢者 認知症	5名

（2）活動内容

選定した団体を訪問しボランティア活動を行う。加えて、団体の方から直接話を伺う時間を設け、団体が取り組む社会課題や参加したボランティア以外の取り組みにもついて聞き取りを行う。

活動後は、参加によって得た情報を「発掘ノート」にまとめ、学生スタッフミーティング等で共有する。また、「発掘ノート」は学生スタッフがボランティアの具体的な情報を得るために閲覧できるように、センターの分かりやすい場所に配置し、ボランティア募集チラシに記載さ

れていない細かい情報や魅力を来室者に伝えるツールとして活用する。

3. 参加者の声、得られた効果など

- ・ヒアリング、見学だけでなく、実際にボランティア活動することで、ボランティア募集のチラシや団体の説明だけでは分からない活動内容や活動に対する思い、雰囲気などを直に感じることができた。
- ・今年度は障がい者・児、認知症の高齢者などのボランティアに参加した。参加する前は障がいや認知症を持つ利用者とのコミュニケーションが上手く取れるのかを不安に感じている学生スタッフもいたが、訪問先の職員さんの丁寧なご指導もあり、ボランティア活動を通じて障がいや認知症を持つ方との関わりを学ぶことができた。参加する前の不安な気持ちは一般学生も感じる点だと思うので、自分たちの体験をふまえてコーディネートをするとう効果的ではないかと思う。

4. 反省

他の学生スタッフに活動報告は行ったものの、学んだことや感じたことまでは十分に共有できていなかった。感じたことを人に伝えることの難しさを感じるが、この点を今後工夫していきたい。

5. 学んだこと・今後の課題

この活動で学んだこと、感じたことを、参加していない学生スタッフに伝え、さらに、ボランティアを探しに来た一般学生にコーディネートできるよう工夫が必要だと思う。ボランティアに参加した学生スタッフの体験だけに終わることのないよう、発掘ノートの充実、活用方法をさらに、模索していかなくてはいけない。

6. 経費

消耗品（バインダー） 108円

〈報告者：二木 亮英〉